

# 生物多様性の保全と水産開発

## *Maintenance and Fisheries Development of the Biological Diversity*

岩崎行伸

子どもの頃であるが、よく見たり、捕たりことのある魚や昆虫を近頃すっかり見かけなくなった。都市化の波は狭い日本の隅々まで広がってきた。チョウやトンボや魚が昔のままに分布・生息しているところがどれほど残されているのであろう？。このことは、何も日本だけに限らない。巨大な密林ジャングルのあるアマゾン、東南アジア、アフリカといえども急速に文明の波が押し寄せているという。樹木は切り倒され、その跡地には新たな町が出現し、川は生活排水や工場からの廃液で汚染され、生き物は生息できない水棲環境になってきた。



図1. 小型鯨・イルカの群泳（小笠原諸島/西之島、東海大/望星丸）

地球上には、海洋動物超大型のシロナガスクジラや屋久島のような巨大樹木から、水中の動植物プランクトン、土壌中の微生物に至るまで、かなり多くの生き物が存在し多様な物理環境の中で相互に関わりあう地球全体の生態系を構成している。

わが国には、従来より自然環境や野生生物を保全/保護するための様々な制度が知られる。自然環境保全法に基づく、動植物、河川、海岸等国土の自然環境の現状を総合的に把握するための自然環境保全の基礎調査が実施されており、生物多様性を対象とする調査も1994年より始められている。

自然公園法により、わが国を代表するすばらしい自然の景勝地などは国立公園等の自然公園として指定され、その地域の自然環境の保護とともに野外レクリエーションの場としての利用が図られてきた。

鳥獣保護及び狩りに関する法では、狩りできる鳥獣の指定、免許、保護区等により、捕獲制限、保護管理（生息地）また、絶滅の危機に瀕している野生生物の種の保存を総合的に推進するための法ができてきた。

今のところ、地球上には500万以上とも3000万ともいわれる生物種が存在している。しかし、このような多種多様な生物種において大きな危機が訪れている。一説によると、現在年間約4万種が絶滅し、2010年までに50万から100万種類が絶滅してしまうという。



図2. 漁場開発・オオミズナギドリ（駿河湾/東海大/南十字号）

野生生物の保護を進める世界的組織、国際自然保護連合は、1966年から世界の絶滅に瀕する動物のデータをまとめたレッドデータブックを発表した。日本ではこのような絶滅に近づいている生物の実態を把握し、まとめること遅れていたが、日本版（1990）が完成。この

データに見る限り、国内の野生生き物たちの生存環境も可なり厳しい状況に置かれていることが明確となった。

一方、世界における海の中の漁業資源開発は、この30年間に大幅に減少しつつある。とくに200海里の海域を領海とする取り決めが実行されてから、魚介類の乱獲が激しきなり、漁業資源が大きく減少した。ヒトが自然からの恵みを永続的に受けとってゆくためと、マグロが食べたいといっても、獲り尽くしてしまうと食べることができなくなる。そうならないために、無駄使いしたり機能を損なわせたりせず、今後のことも考えて計画的に賢く利用しようとする概念である。決して利用自体を禁止するのではない。

世界には、主な漁場が17ヶ所あり、そのうち13ヶ所について漁業資源の減少がとくに目立つ。中には絶滅寸前の漁場もあり、残りの4ヶ所についても漁獲が現在の水準で続くとすれば、漁業資源の絶滅は避けられないという。世界全体の漁獲量は、1989年をピークとしてそれ以来減少しつつ、しかもカレイ・タラ・メカジキなどという魚種は少なくなっており、アブラツノザメ・ガンギエイ・サメ等の漁獲量のみが増加しているようである。

#### 参考図書

- 1) 地球環境読本(1990):テラスで読む、日本経済新聞社
- 2) 地球温暖化を考える(2006):岩波新書、宇沢弘文著
- 3) 生物多様性(2009):野鳥、通巻738号、(財団)日本野鳥の会
- 4) 漁業白書・水産白書(2008):水産庁

#### 添付資料

図1. 小型鯨・イルカの群泳(小笠原諸島/西之島、東海大/望星丸)

図2. 漁場開発・オオミズナギドリの乱舞(駿河湾/東海大/南十字)

---

水棲&環境研究、新海洋科学漁技研、会員:日本水産学会・水産海洋学会